



GILLETTE MEN DIED

Ferdinando Frega — Nando the Scribe

GILLETTEの男たちは死んだ

男の人生には多くのものが共存している。だが最初に来るのは、やはり必要と欲求だ。

この二つの次元の内側で、人は自らをあらわにする。だが霊的な部分を養うのは感情による決断であって — 冷たい論理の推論では決してない。

今日は私の日だった。会社での時を終えて死んでいった、Gilletteの同僚たちに捧げる日だ。

最初に思いが向かったのは父だった。当然のことだ。涙は終わりがないように思えた。やがて内側から小さな声がこう言った。小娘みたいな真似はやめろ、おまえはGilletteの男だ — すると父が、墓の写真のなかから、それでいいと微笑んだように見えた。

それからマリオを訪ねた。父の時代に知り合った会社の同僚だ。その傍らにはグイドもいた — 三人とも同じ作業グループにいたが、それぞれ性格は違っていた。

二人は私に敬意を払い、私を気にかけてくれた。そしてどんな機会でも、話をひとつ、逸話をひとつ語るには十分だった。営業の出の人間だけが知っている、あの語り方で。

それから、ある教会のなかで — 実際に葬られている場所までは、距離があって行くことを許されなかったからだ — ジュリアーノを思い出した。私を鍛えてくれた友人でエリアマネージャーだ。そしてディ・トゥッリオ博士。会社を偉大にしたあのGillette Italiaの営業部長で、疲れを知らず、刃で武装した剣闘士であることを誇りにする男たちを育てた人だ。

それから一日の終わりに、キャンプおじいさんのことを思った。じかに会ったことは一度もない — 二人が現役だった年月は重ならなかった — だが、三つのことがわれわれ二人を結びつけていた。

われわれはセールスマンであり、書き手であり、フリーメイソンだった。そして円を閉じるように、二人とも、世界とそのなかにいる人間を変える仕組みをどう築くかを考えていた。彼は物理的にやり遂げ、私は認知的にやろうとしている。そして二人とも、それが難しくはあっても不可能ではないことを知っていた — 新しいものが生まれるときは、いつもそうであるように。

すべてのGilletteの男たちに、さようなら。

フェルディナンド